

伊勢俳壇・麦林派研究

— 麦浪を中心に —

岩 永 淳 美

一、はじめに

俳諧において、その才能と後代への影響力が最もあるのは、松尾芭蕉（正保元年（一六四四）～元禄七年（一六九四））であろう。芭蕉は全国を旅し、自身の「蕉風俳諧」を広めようとした。その中で、芭蕉は伊勢を重要視し、何度も参詣に訪れたことが知られる。その理由に、伊勢は、芭蕉以前から俳諧が発展していたことが挙げられる。伊勢の俳諧は内宮神官の荒木田守武（文明五年（一四七三）～天文一八年（一五四九））に始まる。

そして談林俳諧を広めた足代弘氏（寛永一七年（一六四〇）～天和三年（一六八三））を初世に、「神風館」という館号が存在した。神風館は、弘氏の死後一時衰退していたが、後に俳諧流派としての「神風館」を再興させたのが、神宮神職の岩田涼菟（万治二年（一六五九）～享保二年（一七一七））である。涼菟は芭蕉最晩年の入門者であると言われる。また、蕉門であり美濃派の中心で、俳論書の著作を多く持つことで評価の高い各務支考（寛文五年（一六六五）～享保一六年（一七三二））に兄事したとも言われる。支考は元禄七年（一六九四）頃から伊勢に

庵を結び、伊勢俳諧の旗揚げになったとされる『伊勢新百韵』（元禄十一年（一六九八）刊）の刊行を支援する。支考と涼菟の支援を受けて『伊勢新百韵』を実際に編んだのは反朱と乙由（舎号麦林舎、延宝三年（一六七五）～元文四年（一七三九））である。この乙由は、涼菟没後の伊勢俳壇の中心となったが、神風館とは別に「麦林派」という俳諧流派を立ち上げた。神宮師職中心の神風館と異なり、全国各地に門を開いたことが特徴である。麦林派は乙由の息子・麦浪に受け継がれることとなる。

本論文では麦林派、その中でも特に麦浪が引き継いだ麦林派に着目する。現代までその名が受け継がれる神風館と違い、麦林派にはまだ分からないことも多い。だが、涼菟も支考も芭蕉門人であるため、支考に師事した伊勢の乙由も当然、蕉風俳諧に傾倒していたと考えられる。実際には、「支麦の徒」という言葉があるように、美濃派と麦林派が作風の平俗さや俳壇の形態など類似点が多いことが江戸などの蕉門連中から批判される。逆に、平明であるが故に親しまれ、各地に広まった功績を認める意見も近代以降にはある。だが、こういった批評は、後付け

のものであることを強調したい。つまり、その俳書が刊行された当時、その俳人が第一線にいた当時に、周囲がどのように彼らを捉えていたのかを明らかにする必要がある。

その方法として、俳壇と俳論という二つの柱を立て、それぞれから伊勢俳諧の実態を考察する。そのため、近親性の高い美濃派や、支麦の徒と批判を加えた江戸俳壇における麦林派の捉え方の把握をする。そして麦浪が編んだ俳書に入集した俳人とその地域の検討を行う。また、実際に詠まれた句の精読・解釈をも加えてゆく。以上により、伊勢俳諧の外部からの評価を確認し、麦林派内の俳諧史的な位置づけを再評価することが本論文の目的である。

二、麦浪の「麦林派」運営

1、「麦林派」とは

先ほど述べた通り、乙由によって形成された麦林派は、神風館に比べ各地との交流が盛んで伊勢以外にも門人が多いという特徴がある。しかし俳書に入集する俳人は神風館との共通者も多く、両派の交流も盛んであった。

さて、乙由に学んだ俳人には、大和の古山や加賀の希因など、名の知られた者を始め、伊勢にも麦浪よりも俳歴の長い重鎮俳人（岸虎、兎士など）がいる。それにも関わらず、麦林派を引き継いだのは息子である若き麦浪であった。本章では、麦浪の編纂した俳書などの入集者や地域に目を向け、「麦浪の引き継い

だ麦林派」を俳壇面から明らかにしていきたい。

2、俳書から見た「麦林派」

麦浪の編纂した俳書の俳人とその入集地域を表にまとめ、考察する。中心にする俳書は麦浪編『秋のかぜ』である。本書は寛保二年（一七四二）刊の乙由三回忌追善集である。岸虎・兎士・蘭輅ら歌仙、伊勢俳人の追悼句、東武・尾州・美濃・加州・越国など、幅広い地域から寄せられた発句を収める。この俳書の入集地域を乙由の影響範囲、入集者を乙由と交流のあった俳人だと考えることとする。これらの入集者に、地域や年代や内容などが『秋のかぜ』と関係深い他の俳書での入集状況を加え、当時の麦林派と近隣俳壇との関わりの様子を考える。他の俳書として選択した俳書は以下の通りである。

①『渭江話』（巻五・六）：廬元坊編、元文元年（一七三六）刊、京都橘屋治兵衛板。支考七回忌追善集。江戸・尾張・伊勢・美濃を始め掲載される地域は全国に渡り、入集者数も多い。美濃派や支考の影響力を知ることができる俳書である。全ての入集者の地域が判明するため、支考と関わりのある俳人の地域分布を把握し、乙由との比較点とするため選択した。

②『百蜀魂』：岸虎編、寛保元年（一七四一）刊、東門子板。『秋のかぜ』前年に出されたもう一つの乙由追善集である。乙由存命中に伊勢で開かれた表合（八句からなる連句形式）をまとめたもので、入集者は伊勢地域の麦林門俳人とみられる。乙由と実際に句を交わした門人の名が判明するため選択した。

③『水のさま』…梅路編、寛保三年（一七四三）刊、伊勢山田藤原長兵衛板。神風館四世曾北の追善集。入集者はやはり神風館連中が中心だが、神風館以外の伊勢俳人はもちろん、名古屋や美濃からの入集も多く見られる。『秋のかぜ』との重複を調べることで、神風館俳人の把握ができるため選択した。

④『夏の白根』…麦浪編、延享五年（一七四八）序、伊勢山田藤原長兵衛板。麦浪の延享四年の賀越訪問の際の歌仙や発句をまとめる。乙由の追善集編纂などが中心であった麦浪にとつて、分かる限りで最初の、自身が中心となった俳諧集である。乙由も賀越との関係は深い、本書によつて、乙由によるものだけでない、麦浪自身と周囲との関係性も見えてくるので、貴重な資料であると言える。

これらの俳書を用いて、『秋のかぜ』入集俳人の他書への入集状況（資料1）、「各俳書の入集俳人の拠点地域」（資料2）それぞれを表にまとめた。ただし本稿では、文量の都合上、論じるのに重要な部分のみを資料として提示するに留める。

資料1 『秋のかぜ』入集俳人の他書への入集状況

		加州文通											
		杜妻	岸虎	佐十	栗里	百重	南利	松比	是富	史朋	義謙	里翁	百五
秋のかぜ	麦林追善 (寛保二)	12	3	4	4(信州松 本文通)		1	1	1	1(大正寺)	1	1	1
渭江話	支考追善 (元文元)				1	1(能登)			1	1(加賀小松)	1(加賀 大聖寺)	1(加賀 大聖寺)	1(加賀 大聖寺)
百菊魂	麦林追善 (寛保二)	15	14					13	14				
水のさま	曾北追善 (寛保三)	1			5			6	1				
夏の白根	麦浪集 (延享五)	12			6	5(伊勢)	1	2	7	2(小松)	1(大正 寺)	1(大正 寺)	1(大正 寺)

資料2 表2 「各俳書の入集俳人の拠点地域」一部

		伊勢	美濃
渭江話	支考追善 (元文元)	37	182
秋のかぜ	麦林追善 (寛保二)	123	18
水のさま	曾北追善 (寛保三)	104	18
夏の白根	麦浪集 (延享五)	52	0

資料1は主に『秋のかぜ』巻頭歌仙への入集俳人である。全体を通して目につくのは、『渭江話』には麦浪（別号・杜妻）、乙由の入集句がないことである。『渭江話』刊行年は乙由の没年（元文四年）以前であり、乙由は晩年近いとはいえ、支考七回忌の追善句を一句も寄せないというのはやはり不自然である。

また、資料1の巻頭歌仙俳人を見ると、『百蜀魂』や『水のさま』といった、伊勢に関わりの深い俳書との重複が目立つことから、これらの俳人は、麦林派の中心であると考えてよい。その中で百董や東里のように、伊勢以外の住である俳人もおり、麦林派の全国的な広まりが確認できる。さらに、『夏の白根』と『秋のかげ』内「加州文通」との俳人の重複は特に目立つ。『山中集』（涼菟編、元禄一七年（一七〇四）刊）で見られる加賀俳壇と麦林派との関わりが麦浪にも受け継がれていることが窺える。

資料2は、美濃地域俳人の入集者数を取り上げたものである。『渭江話』では一八二名もの俳人が名を連ねる美濃地域だが、『秋のかげ』では激減、さらに『夏の白根』では美濃地域の俳人が確認できない。『渭江話』で「美濃の部」に名が見える俳人の内の三名は、『夏の白根』にも入集しているのだが、『夏の白根』でその前後の入集者などから考えるに、美濃よりも加賀や越中との関わりが深い。なお彼らが『夏の白根』編纂時、美濃に拠点を置いているのかは確定出来なかったので表に計上しなかった。

『夏の白根』の入集俳人が美濃と全く関わりがないわけではないことは、この三名の入集からも分かることだが、注目すべきは、『夏の白根』上下巻全てを通して、「美濃」という言葉が一度も見られないことである。『夏の白根』では、美濃地域の俳人の激減だけでなく、言葉を使わないことにより、「美濃」を遠

ざけようとする意識が見える。つまり『夏の白根』は、単に乙由の追善集というだけでなく、麦林派を引き継いだ麦浪の思惑がある俳書である。つまり、麦浪には、乙由の頃には色濃く残っていた美濃派との関わりを断ち切って、自らの率いる「麦林派」を独立させようという意志があるのである。

次章で、俳論面から見た麦林派を考察する。

三、支考・乙由・綾足・麦浪の俳諧論

1、支考の俳諧論

まず支考への評価を概観する。俳人逸話集『歴代滑稽伝』（許六著、正徳五年（一七一五）跋）によると、「此坊発句大下手也。一生秀逸の句五句となし。文章もしさみらしく書つゞけ侍れど、口より奥まで趣意が通らず、言葉つゞき半分なぐり、つゝに決定したる所なし」と酷評される。

支考自身は、『二十五箇条』（元禄七年（一六九四）奥）で「発句は屏風の画と思ふべし。（中略）此ゆへに俳かい姿を先にして、心を後にするとなり」と述べ、美濃風は、客観的な景趣景物の描出に力を置いて詠むべきということを主張する。しかしこれは、支考が評価される理由の一つである、支考が大成した付合理論と相反するものである。

その付合理論とは、則ち「七名八体」論である。連句は付合によつて変化がもたらされるもので、その付方の趣向や句作の狙いどころを示した手法が七名八体である。支考著の俳論書『俳

諧十論」(享保四年(一七一九)刊)によると、付ける際には「前句の言外を見尽し聞尽して、聊も己が按拝を附けずして夫々の道理をさばきたらん」ことが重要なのだという。しかし、同著においては発句について「発句は太極の一氣にして、虚より発りて実にとまれば、本より道理もなく、理屈もなく、まして法もなく式もなし」と述べており、付句に対する理論的な考えとは異なる姿勢が、前述した美濃派批判の一因となっている。だが、七名八体論の確立が支考の最大の功績であることは事実である。

2、乙由の俳諧論

ここでは乙由の伊勢風に関し、各時代の評価から、周りの認識する伊勢風はどのようなものかを探る。

江戸の俳人柳居(貞享三年(一六八六)～延享五年(一七四八))は、美濃派から乙由の麦林派へ走ったことが知られる。それは寛政七年(一七九五)成立の『在し世語』の記述から分かることで、頼原退蔵氏によつて「平明なだけの美濃派よりも、一工夫ある伊勢派に惹かれたのだらう」と考えられた。つまり、少なくともこの頃の柳居は美濃派と伊勢派の句風に対して別物であるという認識をしていたと言える。しかし、元文二年(一七三七)に『捲簾』が刊行された頃においては、楠元六男氏が「この段階においては、美濃・伊勢を峻別するような意識はなかったようだ」と結論付けている⁴。つまり、乙由と美濃派の句風の違いは、後代になつて意識されるようになったということ

とである。

また、『俳家奇人談』(玄玄一著、文化一三年(一八一六)刊)の乙由説話を見ると、発句に関しては「唯眼前の風様を言侍るのみ」という考えで、試しに一句詠むことを求められ、畠に通う男を見て「百姓の鰯かたげ行さむさかな」という乙由の代表句を詠んだとされる。乙由のこういった発句に対する姿勢は、柳居が傾倒した麦林派の「一工夫ある句風」とは異なるが、この考え方は伊勢派独自のものではなく、芭蕉の考えにも見ることが出来る。だからこそ支考も発句に対しては理屈や形式に捉われないことを良しとしていたのである。つまり支考や乙由は、芭蕉の句風を引き継ぐとしたと言える。

さらに、伊勢と美濃の句風の差異に関連して、蕪村の俳諧論「取句法」をあげる。凡董編『点印論』(天明六年(一七八六)序)に所収されたそれに、「伊勢流」「美濃流」という言葉が見える。内容は、蕉門と自らを名乗る者たちは芭蕉翁の思いをきちんと理解しておらず、そういった者たちは「支麦の俗習」を抜けるものではなく、これを「伊勢流或美濃流」と称し、周囲に「田舎蕉門」と呼ばれていたことを述べる。これが書かれたのは明和年間で、文面から「伊勢」と「美濃」を同一視していることが分かる。しかし、裏を返せば、「伊勢流」「美濃流」という二つの言葉があるということは、二つの俳諧流派が、その句風は別にしても、言葉として、また周囲の認識として、区別されていたことを重要視したい。

3、綾足の俳諧論

伊勢派宗匠である綾足は支考に対し、特に七名八体に関しての手厳しい批判をする。綾足の伊勢派俳論書『いせのはなし』（延享五年（一七四八）刊）で、「麦林のおしへに七名八体の論ありや、予答ウ、無し。又問、翁のおしへにありや、予曰、しらず」とする。後に続く文章からも、支考が理屈に堕ちていることを難じていることが分かる。また、俳諧逸話集『芭蕉翁頭陀物語』（寛延四年（一七五二）序跋）内では、乙由が支考と付句を争って圧勝するといった説話が描かれ、綾足からは、元から発句の評価が高い乙由に付句でも敵わない支考という認識を下されていることが分かる。

乙由に対しては、同じく『いせのはなし』において、俳諧の点取⁵について触れ、「麦林の点声には一軸珍重の褒美ある事、全一座の褒美にして我がちのあらそひなかれと也」と述べる。その前後の記述から、点取俳諧は優れた判者が居なければするべきではなく、乙由が判者として優れていたことを述べる。点取俳諧から道の開かれた一句立は、伊勢一句立にも発展し、これを綾足は付句の句立練習のためによく用いた。

伊勢一句立での主要素である「一字の扱い」を重要視することとは、綾足独自の理論ではない。芭蕉にもそういった理論はある。発句に関してもそうであった。そうすると、綾足が傾倒した伊勢派にはどのような独自性があるのかと言え、それは「伊勢一句立」である。綾足は付合において「一字の扱い」を

重要視しており、その修行のために「伊勢一句立」を奨めていた。実際に、綾足は自身が刊行した多くの俳書の中でも、特に集中して「伊勢一句立」に関する俳書を刊行している。それだけ、自身の句風を広め、学ばせるために、「伊勢一句立」による句作練習が必要だったということであろう。

4、麦浪の俳諧論

支考・乙由・綾足という三者の句風を概観してきた。支考と乙由は、七名八体論を除けば、発句に対する考え方などは共通していた。さらにそれは、芭蕉の望んだ句風であったことも述べた。そういった意味で、支考や乙由が俳壇に立っていた頃、伊勢や美濃の句風が同一視されていたとしても何ら違和感はない。その典型的な俳書が、『伊勢新百韵』である。歌仙百句の短いものだが、乙由による伊勢派運営の始まりであると言ってもよいだろう。『伊勢新百韵』の巻頭に、「俳諧条々」と題した条項がある。句作において重要視すべき事柄が五つ並び、最後に、「右此条々は南良茶三石喰ふて後、はじめてはいかひの意味をしるべしと、ばせをの翁も申されし」とある。「ばせをの叟」とは芭蕉を指し、芭蕉の教えを条項にまとめようとしたことが窺える。麦浪が麦林派を引き継いだ際、当然に、乙由の著作物を研究し、麦林派を習得しようとしたと考えられる。よって、この「俳諧条々」に見えるような芭蕉の教えにも、麦浪は触れていたと考えるのである。

だが、麦浪による俳論書が残っていないのはもちろん、『俳家

奇人談』などの逸話集にも麦浪の名は残っていないため、麦浪の考えや周りからの評価は明らかにできない。ただ、綾足の著作の中に、麦浪に関する記述を見ることが出来る。『俳諧南北新話』（延享五年（一七四八）序跋）の「麦林集解嘲」と題された文である。『麦林集』（元文四年（一七三九）頃編）は乙由の遺稿集で、編纂は麦浪である。この綾足の文によると、『麦林集』は麦浪の「大なるあやまちなり」というのである。その理由は、『麦林集』が、乙由の句を選別することなく、とにかく列挙したもののようで、多くある乙由の句の内、似た形の句や取るに足らない句などもまとめられているため、畢竟麦林をしらざる徒なり」と評されている。この『俳諧南北新話』の刊行年は麦浪の『夏の白根』と同年であるため、綾足は『麦林集』編纂当時の麦浪に対する評価しか下していない可能性はある。しかし綾足にとって、麦浪が未熟な存在であったということに疑いはない。

また、綾足が「伊勢一句立」に傾倒していたことは前述したが、そこでも麦浪への態度を窺える部分がある。綾足の「一句立」に関する俳書の刊行は寛延・宝暦に集中しているが、これらの俳書にも、乙由の名はあっても麦浪の名は見えないということである。特に『俳諧連理香』（宝暦十一年（一七六一）刊）は綾足の一句立論の集大成ともいえる句集で、各地の俳人から句を集め、伊勢からの入集もあるが、麦浪の入集は一句もない。他の俳書で麦浪が入集しているものは、延享年間が中心で、綾

足が「伊勢一句立」に関する俳書を刊行するより以前となっている。

こういった点から考えて、麦浪の評価は、未熟さから来る句の選眼の甘さと、付合技量の不足ということになるだろう。あくまで綾足からの評価ということに限定されるが、これにより、綾足が魅力を感じた「伊勢俳諧」の独自性は、「一字の扱い」に関連を持つ「伊勢一句立」であるとも結論付けられる。

次に、実作を見て検証を行う。

5、麦浪の実作検討

実際に麦浪の句風がどうなっているかは、やはり麦浪の句を見なければ分からない。よって、『夏の白根』などの俳書を中心として、麦浪やその他関わりの深い俳人の句を抜き出し、解釈を加えることとする。『夏の白根』中の句は翻刻資料だが、字体や行送り位置は底本通りとし、濁点や句読点は適宜施した。また最後のカッコ内は巻と丁数を示す。

兔橋斎即興

雲を起す蚊遣の中に白根かな 杜菱

水打音は竹の夕立 乃露

唐門の堀も六丁一里にて 是宙（上・十才）

白根とは石川・岐阜両県境にある白山の異称であり、三大名山の一つである。書名『夏の白根』の由来になったとも考えられる。白山が蚊遣の煙でできた雲の中に浮かび上がる。煙と雲とを取り合わせて白を導いた情景の発句。また付句では、竹林

の葉が擦れ合う音に雨音を連想させる見立ての句で返している。この発句は、書名になったことから、杜菱（麦浪）の力が込められていると考えてよい。

イ人叟八十有餘の肩もうるはしく猶十かへりのすを待のみ
松の尺風にそよぐやことし行 杜菱

ほとゝぎす聞雲も一片 イ人
朝起も湖よごす舟掃て 杜十（上・十一才）

イ人は涼菟と乙由の加賀訪問を描いた『山中集』にも入集している俳人である。他にも同様の俳人を交えた連句が『夏の白根』に入集していることから、麦浪は、乙由と交流のあった俳人の元を、個別に尋ねたと考えられる。麦浪による発句には、長寿伝説にまつわる謡曲「老松」や「高砂」をやつてイ人の長寿を祝っている。またホトトギスが日本に居るのは梅雨時で、夜中に鋭い声で鳴く様子が、上代から盛んに詠まれ、冥土の使いなどと考えられていた。そこから、発句の「松」に麦浪からの長寿祝いを読み取ったイ人が、「ほとゝぎす」を付けることで、発句の「風」で流れた雲が「一片」になったという経過を添えたものである。

麦浪が加わった連句の内、一部を取り上げた。その他のものを見ても、全体を通して感じられるのは、「旅」をその風景に取り合わせた句が目立つ。単純に風景を詠む場合でも見立てが多うされ、イ人に対するような、訪問時の挨拶句でも、謡曲などが下敷きになっているものがある。同時に、乙由の関係者を回

って句を交わす辺りに、老年の相手を立てる麦浪の俳壇運営への苦勞が感じられる。

次に麦浪の発句を検討する。下巻において、知十亭を訪れた際に詠んだ句を挙げる。

知十亭にて

苅ぬ田をたづね当けり稲雀 麦浪

十三夜は海邊に遊ぶ

影落て貝にひびむや十三夜 全

珂城亭に招かれて

秋雨や松に弾ては軒の琴 全（下・十四才）

それぞれに解釈を加えると、一句目は秋の収穫前の田に群がる雀を描いた情景句、二句目は八月の十五夜に次いで月が美しいとされる九月十三夜、海辺の貝が月光を受け影を落とす様子。恐らく貝を月に見立て、その満ち欠けの様子をも詠み込んでいるか。三句目は雨の降りかかる松を琴を弾く様子に見立てた句。「秋雨」は近世中期以降の新しい俳諧語句である。

このように、発句においても、見たままを詠んだ句よりも、どこことなく美しさを感じる、一工夫入れた句が麦浪の傾向としてあるようである。

『夏の白根』入集の他の俳人にも着目する。比較のため、『渭江話』などに収められる発句をも掲出する。

まず加州の素由であるが、

目には菊耳には鹿の山路かな『渭江話』

いろ／＼の手向もつきぬ花野哉『秋のかぜ』

肩と肩夕日摺合ふゆうべかな『夏の白根』

と、いずれも一目瞭然でわかりやすい句を詠んでいる。

また滑川の俳人・知十は、

砧へ着せた音の肌寒『渭江話』

衣千山も答るきぬたかな『夏の白根』

と、別作品で同じく「砧」を詠んでいるが、謡曲「砧」を下敷きにしたと思われ、相手を恋焦がれる淋しさは、前句「寝仕舞をさそふて月も入かゝり」からその趣向を引いてきた『渭江話』での付句の方が強く感じる。『夏の白根』入集句「衣干」は持統天皇の和歌「春過ぎて」を意識したものか。もちろん、この句を詠んだ時には、知十自身が数年前に連句で詠んだ「砧へ着せた音の肌寒」を思い出し、それとは違う趣向にしようとした意思が感じられる。

以上、一部だが麦浪と周辺俳人の句を検討してきた。それによると、麦浪の句は綾足の言う伊勢の句風とは異なり、見立てややつしの句が中心となっている。こういった平明さの中に見える一工夫がある句は、『伊勢新百韵』に見える句風である。つまり、麦浪が乙由の句風を学んだのは、『伊勢新百韵』が始まりであると考えるのが適當ではないか。『伊勢新百韵』に美濃派とは異なる技巧的な部分が認められることは、堀切実氏の論文『伊勢新百韵』の俳風？』において、「いわゆる「姿先情後」の美濃風「かるみ」の平明のみを追わずに、当代流行の江戸座

言語遊戯にも一脈通ずるところの、俳諧的な趣向と作意のおもしろさを絡ませてゆこうとする意図があったことは疑いない。」という記述からも明らかである。よって、麦浪が守ろうとした伊勢派の句風というのは、『伊勢新百韵』に由来すると結論付けられる。

また、周辺俳人として素由と知十の句を取り上げた。二名とも『渭江話』にも入集しており、支考と無関係ではない。また素由は前章でも述べた通り、美濃に拠点を置いている時期もあった。対して知十は越中国の滑川の俳人であり、拠点とする地域は異なる。二名の句作を見ると、技巧もなく素直な句を詠む素由と、やつしに取り組もうとした知十というように、その傾向が分かれている。知十に関してはその亭を麦浪が訪れていることから親密さが窺え、それが二名の句風の違いに表れている。つまり、句風の違いというのは、居住地よりもむしろ、誰に師事したか、自身がどういう句風で句を詠もうとするかによって生まれるものだと考えられる。

そうすると、麦浪は乙由から引き継いだ麦林派の句風の特徴を、その言語遊戯性に見出したのだらうと考えられる。そして、後代において「いわゆる伊勢風」という句風が出てきたときに、美濃派の平明な句とは異なる、見立てなどの工夫が用いられるものだと言われる。それは、麦浪によって、麦林派の句風を広め定着させる目的が達成されたからだと考えることができるのである。

四、おわりに

麦浪の麦林派運営を概観すると、乙由死後、乙由の遺稿整理や追善集の刊行に追われ、現在伝えられる著作も殆どそれに関わるものである。しかし、麦浪自身の旅と各地の俳人との交流を記録した『夏の白根』は、注目に値する資料である。

特記すべきは、麦浪が「美濃」を遠ざけようとした意思が見られるという点である。美濃に関わりのある俳人が全く居ない訳ではなく、「美濃」という言葉が全く使用されていない。重要なのは、麦浪の意識として「美濃」という看板を遠ざけたことであつて、麦浪がそれを避けるべきだと考えていたということである。そこから、乙由の頃は美濃派と同一視されていた伊勢の俳諧を、独立させようとしていたことがわかる。

また、支考・乙由・綾足・麦浪それぞれの俳諧論や、彼らの考える「伊勢風」などの句風がどうなっているかを考えた。その結果、乙由自身の句風や門人に伝わった俳諧観と、綾足の捉えた「伊勢の俳諧」と、さらに説話などから分かるような後代に認識される「いわゆる伊勢風」を指す句風とは、同じではないことが判明した。そこに加えて、麦浪が目指した句風は『伊勢新百韻』に見られるような芭蕉を意識したものとは結論づけた。つまり、綾足の捉えた「伊勢風」と、麦浪が引き継ぎ、発展させることを目指した麦林派との間には隔たりがある。この「伊勢風」に対する綾足と麦浪の考え方は、「伊勢地域的美濃派」という周囲からの印象を払拭しようという思いが根底にあるとい

う点では共通している。つまり綾足の俳諧活動期はまだ、「伊勢風」は美濃派の一部であるという認識が浸透していたということである。それが、後に「支麦の徒」批判が出る頃には「伊勢流・美濃流」と並列的な扱いになっており、これは乙由以降に、何らかの功績があり、伊勢風が形の上では独立を果たしたと考えるのが自然である。だが「支麦の徒」批判の「伊勢流」は技巧のない平俗な句を指し、これは乙由の発句への態度が最も近い。それが広まった要因には、綾足による伊勢風称揚の影響が少なからずあるであろう。

だが麦浪の功績はそれとは異なる。麦浪が目指したのは『伊勢新百韻』に見られるような、見立てややつしをよく用いた、平明ながらも一工夫ある句風である。そして『伊勢新百韻』は伊勢風の旗揚げとなった俳書である。麦浪は、麦林派を継いで俳諧宗匠となった時、乙由の遺稿整理や追善集編纂にあたりつつ、乙由の俳諧観を研究・会得しようとしたに違いない。その中で、『伊勢新百韻』を伊勢風の原点と考え、それを麦林派として各地に広めようとしたのではないか。だからこそ、付合の理論にとらわれた七名八体には納得できず、支考の理論を遠ざけたのである。さらに麦浪は各地を旅して、自身の理想とする俳諧を広めるために土地土地の俳人との実作を行った。結果として、歳旦帳や麦浪の追善集にも見られるように、乙由以上に幅広い地域との交流を持つに至った。これは、麦浪が乙由から引き継いだ麦林派という基盤を守り、乙由の門人とも丁寧な交

流を心がけた結果である。そして伊勢風の独立を成し遂げられるよう、美濃派と異なる句風を守り抜いたことによる、麦浪の功績であると、評価するべきなのである。

引用にあたって、原文を通用の字体に改め、適宜句読点を補った。

【出典一覧・参考文献】

楠元六男「佐久間柳居（1）」（4）（副題略）『都留文科大大学院紀要』1巻〜4巻、都留文科大大学院、平成9年〜12年。

『渭江話』（鈴木勝忠・白石悌三校注、『古典俳文学大系 11』享保俳諧集、集英社、昭和47年3月）。

『百蜀魂』（早稲田大学図書館公開、寛保元年（一七四一）序）。

『水のさま』（岡本勝『水のさま』（翻刻と解題）『国語国文学報』42、昭和60年3月）。

『秋のかげ』（愛知県立大学図書館蔵、寛保二年（一七四二）序）。

¹ 支考を祖とする美濃派と、麦林舎を号した乙由系統の伊勢派とを一括して軽んじて遠ざける語。地方系蕉門の主流にあったが、作風の平俗、行脚を主とする行動形態、組織的な地方俳諧の拡大など共通点が多く、俳壇の中で特異。（支麦）項参照、加藤楸邨「他二名」監修、尾形仿「他四名」編、『俳文学大辞典 普及版』角川学芸出版、平成20年1月）。

『夏の白根』（和露文庫）。

『歴代滑稽伝』（神田豊穂著、『日本俳書大系 15』俳諧系譜逸話集、日本俳書大系刊行会、昭和2年5月）。

『二十五箇条』（大磯義雄・大内初夫校注、『古典俳文学大系 10』蕉門俳論俳文集、集英社、昭和45年9月）。

『俳諧十論』（『俳諧十論発蒙』（佐々醒雪・巖谷小波編、『俳諧註釋集 下巻』博文館、大正2年5月））。

『いせのはなし』（『俳諧南北新話』（建部綾足著作刊行会編、『建部綾足全集』第一巻（俳諧I）、国書刊行会、昭和61年6月））。

『芭蕉翁頭陀物語』（建部綾足著作刊行会編、『建部綾足全集』第六巻（文集）、国書刊行会、昭和62年2月）。

『俳家奇人談』（文生堂版、早稲田大学図書館公開、文化十三年（一八一六））。

『伊勢新百韵』（宮本三郎・今栄蔵校注、『古典俳文学大系 7』蕉門俳諧集二、集英社、昭和46年1月）。

『去来抄』（伊地知鐵男・表章・栗山理一校注・訳、『日本古典文学全集 51』連歌論集 能楽論集 俳論集、小学館、昭和48年）。

² 「大和に古山、加賀の希因、越中に麻父、江戸に柳居（麦阿の後）、これら麦林下の四天王と世挙て仰ぎぬ」（『在し世語』、鳥明編、寛政七年（一七九五）成）。

³ 顕原退蔵「柳居―過渡期の人―」（『国語国文』16巻6号、京都帝国大学国文学会、昭和23年1月）。

⁴ 楠元六男、「佐久間柳居（2）―享保期江戸俳壇における芭蕉復古運動

推進者の実態」(『都留文科大学大学院紀要』2巻)。

⁵ 「点」とは連俳用語であり、元々作品への評価を示す記号であつたが、のちに相手と句の出来を争ひ勝敗をつける点取俳諧へと発展し、一句立ての道を開いたと言われる。「一句立」は「笠付」の一種で、上五句を題として一句を整える。その中でも「伊勢一句立」は、四文字を題とし、作者が「てには」を加える。例えば、「仕立屋」の四文字に作者が「が」の一字を加え、「女房のやうに叱るなり」と付ける。「一句立」と異なるのは「が」のような「てには」の一字が重要視される点である。「てには」を重要視し、その一字の違いで句の評価が変わることは、綾足に留まらず芭蕉ら幅広い俳人が古くから述べていることである。この「一字の扱い」に関して、綾足の俳論書『俳諧南北新話』(延享四年序跋)の記述を見ると、希因の詠んだ「方々にいづみ式部は墓がある」という付句に対し、周りが「いづみ式部の墓がある」としても変わらないだろうと評したところ、乙由は「の」では意味が変わつてしまい、「は」だから高い点をつけられるのだと述べる。これは麦林を判者とした句会の様子を述べた説話であるが、綾足がこれを書いたということは、綾足も同意する考え方と言つていいであらう。

⁶ 『去来抄』(去来著、宝永元年(一七〇四)ころ成)に、「手尔波は天下いまいの手尔波にて、誰もしるものなり。一字もたがひあれば、必ず通ぜず」などという記述があり、この考えが広く受け入れられていたと言える。

⁷ 堀切実『伊勢新百韵』の俳風」(同著『蕉風俳論の研究—支考を中心に—』所収、明治書院、昭和57年4月)。

⁸ 宝暦十年(一七六〇)に麦浪が編んだ歳旦帖が現存している。これに句を寄せている連中の中には讃岐の俳人が多く居る。また麦浪の追善集『居待月』(為溪編、安永三年(一七七四)序)も刊行されているが、これを編む中心となつたのは讃岐の俳人為溪らである。讃岐との関係は、乙由の頃には殆ど見られないものであり、これは麦浪自身が切り開いた親交であると思ふ。

⁹ 支考が『俳諧十論』により伊勢で講弁した記録を、蝶夢が他の俳論書などと校合し、本文に詳細な注を付ける形で記したもの。明和元年(一七六四)閏十二月成。

「いわなが・あつみ 本学卒業生」